

～旧約聖書を読んで感じること～ (32)「遊女ラハブ」

モーセに後継者として選ばれたヨシュアはモーセの死後、カナン征服の計画を練りました。まず、ヨルダン川の西にある世界最古の町と言われるエリコの陥落を目論み、密かに二人の斥候をエリコとその周辺を探らせるために送り出しました。



エリコの遊女と二人の斥候 James Tissot

二人はエリコに行って、ラハブという遊女の家に入り、そこに泊まったと記されています。遊女の家は絶好の隠れ場所になったのでしょうか。日頃、遊女を忌み嫌っているのに、利用するときは利用するのだと驚きます。さて、ラハブの家へ「イスラエルの何者かが探りに忍び込んだ」とエリコの王に告げる者が出て、さっそくラハブにその者達を引き渡せとのお達しがありました。斥候たちは怯えたことでしょう。

女は、急いで二人をかくまい、こう答えた。「確かに、その人たちはわたしのところに来ましたが、わたしはその人たちがどこから来たのか知りませんでした。日が暮れて城門が閉まるころ、その人たちは出て行きましたが、どこへ行ったのか分かりません。急いで追いかけたら、あるいは追いつけるかもしれません。」(ヨシュア 2:4-5)

と、嘘を言って王を欺きました。とっさの判断でラハブは自分の王より、外国のスパイを選んでしまったのです。

家に迎えた客を保護することは非常に大事な務めですから、その点で、ラハブは優秀で、頼りがいのあるしっかり者です。同時に、イスラエルについての情報が、すでに噂となって、カナン一帯に流れていて、民は皆、非常に恐れていたのです。ここまで強いイスラエルには、神の力があると思わずにいらなかったでしょう。ラハブは、カナン人でしたが、神を畏れる思いがあったのです。

夜中にラハブはかくまっていた二人と交渉を始めました。彼女は斥候にその思いを伝えました。

あなたたちの神、主こそ、上は天、下は地に至るまで神であられるからです。(ヨシュア 2:11)

けれども、敵側に付くと言うことは非常に危険なことです。ラハブは敢然と取引をしました。

わたしはあなたたちに誠意を示したのですから、あなたたちも、わたしの一族に誠意を示す、と今、主の前でわたしに誓ってください。そして、確かな証拠をください。父も母も、兄弟姉妹も、更に彼らに連なるすべての者たちも生かし、わたしたちの命を死から救ってください。(ヨシュア 2:12-13)

斥候たちは約束し、その証拠に**赤い紐**を与え、エリコを攻める時に窓にその紐を結び付けておくようにと言いました。ラハブはそれを信じて、斥候に更に安全な逃げ方を教えて、二人を逃がしました。



エリコの発掘遺跡

イスラエルは7日間のエリコ包囲の後、エリコを陥落し、占領しました。この時、ラハブの一族を連れ出し、避難させて、助けました。**赤い紐**が目印となっていたのです。遊女と言え、イスラエルが最も忌み嫌う汚れた存在ですが、新約聖書では、ラハブは、**サルモンはラハブによってボアズを**(マタイ 1:5)と、イエス様の系図の中にその名前が記されているのです。同じ人物かどうかは分かりませんが、イエス様は「**はっきり言うておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。**」(マタイ 21:31)とも言うておられます。

ヨシュア記の冒頭に、異教の遊女が神の祝福を受けて、エリコでの「勝利の女神」のような存在として描かれているのは興味深いです。遊女になることを求めている女性はいないでしょう。家族を支え、守るために恥を忍んで、仕方なく引き受けた仕事です。遊女ラハブは、人生の基本に、家族への愛と犠牲がありました。その中で懸命に働き、知恵をめぐらせ、神を恐れ、生き延びる方法をしっかりとつかんだのです。ラハブの家の窓に結ばれた**赤い紐**は「過ぎ越しの小羊の血」を思い出させます。